

「戦没オリンピック」をめぐる調査と課題

—広島県出身選手を事例に—

曾 根 幹 子 (広島市立大学名誉教授)

1 はじめに

広島は戦前から「スポーツ王国広島」と謳われたように国内外で活躍する名選手を多く輩出してきた。特に日本人初のオリンピック金メダリスト・織田幹雄（安芸郡海田町出身、アムステルダム五輪・陸上／三段跳）に代表されるように、世界の檜舞台で雄飛した選手の多さには瞠目すべきものがある。ところが1945年8月6日広島市の上空で原子爆弾が炸裂し、「一般人約31万人～32万人、軍人4万人以上が直接に被爆し、死者は年末まで『約14万人（誤差±1万人）』に上った」¹といわれる中で、オリンピックの原爆犠牲者についてはこれまでの被爆史や広島のスポート史²などを概観してもほとんど記述がなされていない。このことはオリンピックの犠牲者が皆無だったことを示しているのだろうか。

筆者は『広島市被爆70年史』（2018年発行、以下『被爆70年史』とする）の特論執筆に際し³、「原爆によって亡くなったオリンピック」に関する調査を実施した。この調査によって、原爆症で闘病生活を続けながら1963年に亡くなった高田静雄（西区出身、1936年ベルリン五輪・陸上／砲丸投）の存在が明らかになり、『被爆70年史』では広島出身の戦没オリンピックとして高田も含めて4人を紹介した。また、併せて調査した日本人戦没オリンピックについては、論文（日本人戦没オリンピック名をめぐる混乱とその真相—ベルリンに届けられた大島鎌吉の作成名簿更新の試み—）の中で、「日本人戦没オリンピック名簿」（以下、「2016年曾根・ト部名簿」とする）として37人の名前を公表した⁴。

しかし、先の名簿を作成する際に参考にした新聞記事や資料などに誤りがあったことなどが分かり、全戦没オリンピックに関しての再調査と名簿の修正が必要となった。その過程において「2016年曾根・ト部名簿」や『被爆70年史』では漏れていた新たな戦没オリンピック・土井修爾（中区出身、1932年ロサンゼルス五輪・水泳／水球）の存在をつかんだ。土井を含めて現時点（2020年1月31日）での戦没オリンピックは計38人となっている。

本稿では「戦没オリンピック」をめぐる調査についての課題を明らかにするために、これまでの調査の経緯に関する概要を述べた後、「2016年曾根・ト部名簿」名簿の作成で参考にした文献や資料のどこに問題があったのか、なぜそのような間違いが起きたのかを探る。さらに広島出身の戦没オリンピック5人の事例で見えてきた課題について検討し、併せて今回の調査で判明した事実も含めた新たな戦没オリンピック名簿の更新を行うこととする（本文はすべて敬称を省略する）。

2 「戦没オリンピック」調査の経緯

筆者らが公表した2016年の「戦没オリンピック」名簿の作成において手掛かりとしたのは、30人の「戦没選手」名簿が掲載された朝日新聞（1984年7月27日）である⁵。記事には「30代表の戦死が確認されたのは東京五輪（1964年）の開幕前の日本体育協会調査」とあった。筆者らの調査ではこの時に掲載された戦没選手名簿は、1982年に西ドイツの戦没者墓地管理委員会のハンス・ビュティコフファー会長から、当時日本体育協会の傘下にあった日本オリンピック委員会（以下、JOC）の委員だった大島鎌吉⁶が手紙で依頼を受け、彼自身が窓口となり作成したものであることが分かった⁷。大島は先の名簿を1982年7月に直接ドイツに持参し届けている（これ以降「1982年大島名簿」とする）。

では、大島は何を基にして戦没オリンピックの遺族を捜し、戦没者か否かを確認したのか。毎日新聞（1992

年 12 月 17 日)には「1956 年に亡くなったオリンピアン」の慰霊祭を開いた際に戦没者を調べたことはあったが、(略) 靖国神社の『戦没者名簿』と照らし合わせると事実関係が違うケースも判明」とある。記事には書かれていないが、後にこの慰霊祭において「1956 Olympic Day」⁸と表紙に刷られた冊子が配布されていたことが分かった(以下、「1956 年慰霊祭名簿」とする)。

先の「1956 年慰霊祭名簿」は、戦後最も早い時期に日本体育協会が中心となり作成した「オリンピック大会参加者」の名簿である。記載内容は「①役名(※在任期間)または競技種目、②成績、③住所(※遺族)、④遺族氏名、⑤逝去年(戦死、病死別)、氏名の下に太線があるのは物故者」となっている⁹。大島はこの慰霊祭名簿を参考に「1982 年大島名簿」を作成したと考えられた。それを裏付けるように「大島は、連日のように名簿を頼りに受話器を握り、30 人の日本人戦没オリンピアン」の遺族捜しをしていた。間違いのない戦没者名簿をドイツに届け、奉納するためだった」という岡(2015 年)の記述もある¹⁰。

ところで 1964 年 9 月に靖国神社宝物遺品館は「五輪選手を遺品でしのぶ」展示を開催した。読売新聞(1964 年 9 月 28 日)には、「靖国神社に合祀されている元選手は 31 人」として個々の選手名を掲載している。記事と「1982 年大島名簿」を照合すると、大島名簿には記載のなかった 4 人の戦没選手が浮かびあがった¹¹。ただし「1982 年大島名簿」にあった脇坂貞夫、高野重幾、村山又芳の 3 人は掲載されていない。記事には「遺族から遺品が出展された」¹² 選手だけと書かれている。

さらに 2008 年 2 月に昭和館において昭和館特別企画展「オリンピック 栄光とその陰に～アムステルダム大会から東京大会まで～」が開催されたが、その際に発行された昭和館特別企画展図録¹³には、秩父宮スポーツ博物館が 1998 年に作成した「戦没オリンピック選手リスト」(以下、「1998 年秩父宮スポーツ博物館リスト」とする)が収録されている。この時点で当該博物館が把握していた日本人戦没オリンピアンは 35 人であった。リストには「不明」が 12 か所あり、後に筆者が調査したところ 3 人の名前の漢字表記に間違いが見つかった¹⁴。なお先のリストには「1982 年大島名簿」にあった村山又芳の名前は記載されていない。

以上、3 つの調査¹⁵(「1956 年慰霊祭名簿」、「1982 年大島名簿」、「1998 年秩父宮スポーツ博物館リスト」)を照合すると、戦没選手名も人数も一部で相違があり完全に一致したものは見あたらない。ではなぜこのようなことが起きたのか。ドイツのベルリン・スポーツ博物館を訪れると、その理由が明らかになった。日本では「戦没オリンピック」の条件(基準)が曖昧なままに調査が実施されていたのである。

3 「世界戦没オリンピック」の定義

ベルリン・スポーツ博物館には、「世界戦没オリンピック」の名簿が保管されている(写真 1)。名簿には「氏名」「五輪出場年」「競技種目と成績」「戦没年(年または年月日)」が記されている。日本人戦没選手名を掲載した朝日新聞(1984 年 8 月 11 日)によれば、「第二次世界大戦で亡くなった世界 24 か国 283 人」とあるが、同館の名簿には世界 11 か国 161 人のオリンピアン名しか記載されていなかった。しかもこの名簿には日本人戦没オリンピックは 5 人でうち 2 人は戦没者ではなかった¹⁶。つまり大島鎌吉がドイツに持参した「1982 年大島名簿」ではなかったのである。

ところで 1936 年ベルリン五輪の開閉会式で鳴らされた鐘は、刻印されていたハーケンクロイツなどが削られ地中に埋め込まれていたが、1956 年に再び掘り起こされ「戦争と暴力行為によって命を落とした、すべてのオリンピック選手への追悼のための

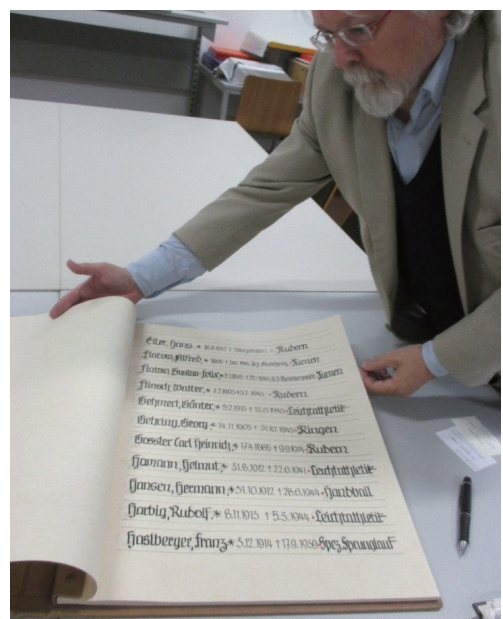


写真 1 ベルリン・スポーツ博物館所蔵の「世界戦没オリンピック」名簿(縦 54.5cm × 横 44.5cm)はすべて手書きとなっている(2015 年 11 月 26 日筆者撮影)

記念碑」の「平和の鐘」として展示されるようになった¹⁷。そのような経緯からベルリン・スポーツ博物館では、「戦没オリンピック」を先の追悼で使われた「戦争と暴力によって亡くなったオリンピック選手」¹⁸と定めている。戦争で引き起こされた以外の「暴力」とは、例えば強盗に殺されたオリンピックなども含まれている。

一方、わが国では日本体育協会やJOCにおいて戦没オリンピックに関する調査はなされてきたが、ドイツにみられるような「戦没オリンピックとは何か」といった統一した定義がないまま実施されていた。このことが各名簿の不一致を引き起こす原因になっていたと考えられた。そこで筆者らはベルリン・スポーツ博物館の「戦没オリンピックとは戦争と暴力によって亡くなったオリンピック選手」の定義を用いて日本人戦没オリンピックに関する再調査を行った。その結果、2016年3月時点では37人の存在が明らかになった¹⁹。なお、正確には「オリンピックに参加した選手・役員」とすることが名簿の趣旨に沿ったものであろう。

4 「戦没オリンピック名簿」(2016年)の問題点

「2016年曾根・卜部名簿」は、問題点を残したままになっている。既述したように先の名簿は、日本体育協会や秩父宮スポーツ博物館の調査、靖国神社が一部公表したリストなどを参考に整理したものであり、「病死」となっているオリンピックの検証が十分ではない。

例えば戦没オリンピックの村山又芳(ロサンゼルス五輪・ボート)は、「1982年大島名簿」では「20.5(昭和20年5月)日本で病死」とされ、遺族(実姉)の所在も掲載されている。一方で脇坂貞夫(ベルリン五輪・ホッケー)は「戦没日」「戦没場所」も書かれていない。しかし村山も脇坂も「戦没選手」として載っている。「1956年慰霊祭名簿」では、両者の連絡先は記載されているが没年は書かれていない。慰霊祭名簿に「思い出の人々」として両者の写真が掲載されていないのは物故者とみなされなかったためであろうが、その判断基準は、「病死」の原因にあると考えられる。つまり戦争が原因で引き起こされた「病死」であることが明らか場合は、「戦没オリンピック」として名簿に記載したと考えられた。そうであるならば「1956年慰霊祭名簿」には、他にも国内で「病死」となっているオリンピックが存在しており、戦没者名簿から除外されている可能性があった。

先述した広島出身の土井修爾の場合も、「1956年慰霊祭名簿」に名前は記載されているが、死因が「病死」となっていたためスポーツ関連団体の戦没者名簿から除外されていた。そのことが「2016年曾根・卜部名簿」や『被爆70年史』で土井の名前が抜け落ちた要因の一つになっている。

ではオリンピックの「病死」を「戦病死」または「戦死」と判断する基準は、どのようにとらえればよいのだろうか。「2016年曾根・卜部名簿」の戦没オリンピックの約9割が大卒であることから、筆者は戦没学生の「戦争犠牲者名簿」にみる死没事由の区分が参考になると考えた。大学別でみると犠牲者が多いのは早稲田大学と慶應義塾大学(以下、慶応大学)だが、両大学では戦没学生の死没事由の記載法に基準を設けている。両大学の戦没者名簿の大きな相違は、早稲田大学は一般学生を含めた戦没者名簿²⁰であり、慶応大学は「軍籍にあった者で軍属を含む。例外として復員後入学して在学中戦犯となり処刑されたものを含む」²¹を対象にしていることである。

両大学では、戦没者名簿作成上の限界として以下を挙げている。早稲田大学は、応召者数・戦没者の年代は教職員1937～44年(昭和12～19年)、学生応召者1939～43年(昭和14～18年)までを把握しているが、「戦争が最悪の事態を迎えた昭和19年、20年両年を欠く等、戦争の犠牲となった学苑関係者の数としては、これは明らかに過少である」²²として、戦没者名簿が「不完全」であることを自ら指摘している。一方、慶応大学は「戦後半世紀の間、全体を網羅する戦没者名簿がなかった」ことや、「最も有用な1943年～46年にかけては『塾員名簿』も『教職員名簿』も『学生名簿』もほとんど存在しない」²³として名簿の限界を示している(同様のことは他大学でも見受けられる²⁴)。

戦没学生戦争犠牲者の「死没事由」の区分をみると、早稲田大学は「戦死」を8つに分類している²⁵。慶応

大学では戦死の種類を戦死確認の典拠や手段などの記録を掘り起こしながらも、戦没者名簿には「特（＝特攻死、必死の特別攻撃中の戦死）」以外記載していない²⁶。慶応大学の戦没者名簿にも記載上の問題点として、「最も重大な誤りは戦死者でない者を戦死者とすることで、これは伝聞を情報源（下線ママ）とするため（略）、情報源の吟味、別ルートからのチェック、戦死の確認が必要で、史料の吟味や可能な場合には遺族への質問などかなりな手数を要する」²⁷ことを挙げている。すなわち戦没者の死亡事由には広義と狭義が入り混じっているため、多方向からのチェックやできる限り遺族にアプローチすることの重要性を示しており、このことは「2016 年曾根・ト部名簿」の問題点とした「病死」の判断に示唆を与えるものである。

上述した戦没者名簿作成上の問題点を鑑みながら「2016 年曾根ら作成名簿」を再考すれば、1944 年～1945 年の間に戦没オリンピックの約 6 割弱が亡くなり、さらにロサンゼルス五輪とベルリン五輪に出場した選手が全体の約 9 割（両五輪出場者は 1 回でカウント）を占め、大学においても正確な戦没者名簿の作成が困難な期間にあたる。特にベルリン五輪の翌年、1937 年 7 月には盧溝橋事件が勃発し、日中戦争が激化する中で日本は 1938 年 7 月に東京五輪（1940 年）の開催返上を決定した。その直後から北支・中支・南支戦線に派兵されたオリンピックの戦死者が増えていく。徴兵については「誰を召集するかは連隊区司令部が決め、市部については市長から、軍部については警察署長を経て町村長から通知する」²⁸とあることから、1940 年東京五輪開催が返上されたことでそれまで兵役免除期間を延長していたオリンピックの召集数が増えていったことが考えられる。

戦争末期になると戦死者の正確な情報が不足しているため「病死」「戦病死」を判断する材料も少なくなる。遺族の証言やオリンピックの軍歴証明書などが不在の場合は、日本人戦没オリンピックたちの正確な名簿を作成するのは困難な作業となるが、以下の事例が示すようにメディアの報道によって縁戚から情報が寄せられ、遺族の所在が明らかになったケースもある。

5 広島出身の「戦没オリンピック」を事例に

既述した戦没オリンピック名簿作成上の問題点を踏まえながら、『被爆 70 年史』で明らかにした広島出身選手の戦没オリンピック 4 人²⁹と新たに見つかった土井修爾を加えた計 5 人を具体的事例として、戦没オリンピックをめぐる調査と課題について以下で検討していく。

5- (1) 土井修爾のケース

ロサンゼルス五輪代表の土井修爾（現広島市中区出身）は、「病死」とされているオリンピックを再調査するうえで、遺族の証言の重要性を示す事例である。

土井は現在（2020 年 1 月 31 日）までに判明している日本人戦没オリンピック 38 人の中で、最も早い時期に亡くなった。中国新聞（1938 年 7 月 23 日）によれば、皮膚の細菌感染症（丹毒）に罹患したことが原因で、1938 年 7 月 7 日に広島陸軍病院で「病死」した。「1956 年慰霊祭名簿」にも「病死」とされている。ちなみに土井の出身大学である早稲田大学の名簿には「戦病死」と記載されており³⁰、広島陸軍第 5 師団歩兵第 11 連隊の戦没者慰霊碑（広島市南区比治山）には、「昭和 13 年（中支・南支方面）」の戦死者として土井の名前が刻まれている。

土井が「戦病死」したのであれば、戦地に赴いた後に罹患したことが考えられるが、宇品港をいつ出発し、何月何日に帰還し広島陸軍病院に運ばれたのか疑問が残る。土井の所属部隊は「徐州作戦（徐州会戦）・警備」（1938 年 4 月～5 月）において、中支・南支方面の戦闘に参加していることから³¹、土井はこれらの作戦中に感染症にかかったのか。中国新聞 1938 年 7 月 27 日夕刊には、中支戦線の第一線から交代帰還した兵士を乗せた船が、宇品に到着したという報道が掲載されている。しかし、土井は同年 7 月 7 日に亡くなっていることからこの時期の帰還ではつじつまが合わない。

先の中国新聞の記事には、「倅は出征を志願し、第一線に立つの（原文ママ）覚悟をきめていましたが、突然丹毒におかされ病死（中略）、本人のため戦場で思う存分働かせて死なせたかったと思います（後略）」と父の與一が語っている。この談話はどのような意味を持っていたのか³²、遺族への聞き取り調査が必要だった。土井の実家があった広島市中町は、原爆投下によって一帯がほぼ壊滅している。しかも被爆後 75 年が経過し遺族捜しは困難であった。ところが土井の存在にあらためて触れた中国新聞（2020 年 1 月 6 日）の記事を読んだ土井の姪からの連絡をきっかけに、兵庫県在住の遺族（長女）が見つかり以下のような証言を得ることができた。

父は戦地で亡くなったわけではありません。無線を使った訓練中に耳に当たる部分に傷ができて、そこからウイルスが入って丹毒に感染し広島陸軍病院に入院しましたが、すぐに危篤状態となり 1 週間であつた間に亡くなったんです。戦地に持っていくために、あつらえたばかりの新しい日本刀などが「土井修爾」と書いてあった柳行李に詰められていて準備はできていました。戦地に行く前に病気で亡くなったのですが「戦病死」として盛大な陸軍葬をしてもらい、連隊でラッパを吹いて送ってもらいました³³。

土井のように国内での訓練中に「病氣」となっても³⁴「戦病死」扱いとなる事例がある一方で、「戦病死」であるにも関わらず「病死」となっているケースもあると考えられる³⁵。召集されたオリンピックの兵役期間中の「病死」が「戦病死」であったことを確認するためには、何を基にどのように調査をしたらよいのだろうか。

「1956 年慰霊祭名簿」では 1932 年と 1936 年の夏季五輪と冬季五輪参加者のうち、特に 1938 ～ 1945 年の期間において、20 ～ 30 歳代で「病死」と記されているオリンピックと大会参加役員に関しては、筆者は少なくとも再調査が必要であると考え（該当する可能性のあるオリンピックは約 7 人で、うち 1 人は「不出場」となっている）。

そこで課題となるのは遺族へのアプローチである。土井はメディアの報道（記事掲載）がきっかけとなり、縁戚から新聞社に連絡が入り遺族の所在が判明したことで「病死」の詳細が明らかになった典型的なケースである。

5 - (2) 若山滝美のケース

ベルリン五輪代表の若山滝美（現広島市中区出身）は「病死（チフス）」となっていたため「1982 年大島名簿」から名前が除外されていたが、朝日新聞（1984 年 7 月 27 日）に掲載された記事を読んだ遺族（妻・美代子）からの連絡により、外地で「戦病死」していたことが分かった。これは土井修爾と同様のきっかけにより遺族の証言が得られたケースである。

朝日新聞（1984 年 8 月 11 日）の記事によれば、若山は「昭和 12 年 3 月に大学を卒業し、同 11 月に結婚したが 1 年足らずで召集され、見習士官教育を受けた後、昭和 14 年 3 月、部隊を追って一人で中国へ。そして昭和 16 年（1941 年）9 月、腸チフスのため野戦病院で亡くなった」とある。早稲田大学の戦争犠牲者名簿には、昭和 16 年 9 月 29 日に浙江省で「戦病死」と記載されている³⁶。

実際には「一人で中国へ」行くことはないため、どのように大陸に渡ったのか不明だったが、若山の所属していた広島第 5 師団は 4 月 6 日「唐津において、浙東沿岸地区に奇襲上陸（略）を命ぜられた。師団命令に接した連隊は 4 月 9 日、10 日の両日（略）西唐津において乗船し、11 日零時朝鮮西南端の木浦に向けて出港した³⁷」とあり、妻・美代子の証言と合致することから、この時に日本を出発した可能性が高い。歩兵第 11 連隊は 4 月 19 日に「浙江省鎮海湾上陸作戦」（浙東作戦）に加わり、5 月 4 日寧波での合同慰霊祭を営んだ後の 5 月 7 日から新配備に就いており、若山も行動を共にしていたと考えられる。

朝日新聞記事（2012 年 8 月 11 日）（広島版）によれば、若山は「第 5 師団第 4 野戦病院に所属していた」とある。

1941 年 9 月 29 日に戦死したのであれば、10 月中旬に第 5 師団が上海に集結するまでの間に罹患して亡くなったことが考えられる。朝日新聞（1984 年 7 月 27 日）に戦没オリンピック名簿の記事が掲載された時点では、妻（70 歳）の所在が分かっていたので証言を得ることができたはずだが、現時点では若山の卒業した広島一中（現広島県立広島国泰寺高校）の同窓会、広島市遺族会にも住所登録はなく、筆者も遺族への聞き取り調査ができておらず、若山の応召後の足跡は定かではない。ちなみに比治山にある歩兵第 11 連隊の慰霊碑に若山滝美の名前は刻まれていない。

5－（3）河石達吾のケース

河石達吾（現江田島市出身）は、戦没オリンピック 38 人の中でも資料や著作物が多く³⁸、さらに軍歴証明、硫黄島から妻に宛てた手紙などの遺品が残されているだけでなく、母校・旧制修道中学校時代の「人物考定」「学業成績」「身体検査成績」も保管されている³⁹。「戦没オリンピック」の中でも河石のケースは幼少から戦死に至るまで、人柄なども含めて詳細が明らかになっている事例である。

河石は同じロサンゼルス五輪に出場し硫黄島で戦死した西竹一（馬術／大障害飛越優勝）と共に、これまで様々なメディアでも語られてきた選手の一人である。先の両選手のように戦没選手のライフヒストリーが詳細に残されているケースの特徴としては、彼らのエピソード—例えば大江季雄（ベルリン五輪・陸上）の「友情のメダル」など—に魅かれた者によって著作物として残されている点にある⁴⁰。しかし、そのようなケースは意外と少ない。

河石が卒業した江田島市の大古小学校では、これまでに河石の人生を脚本化し「演劇」として子どもたちが上演したり、「河石達吾 硫黄島からの手紙」と題して遺族（息子・達雄）自身が書いたり⁴¹ 講演会を開いたりしながら、郷里や遺族によって「ライフヒストリー」の継承がなされてきた。戦没オリンピックのエピソードや資料、証言が今日に至るまで残されてきた要因の一つには、こうした活動が繰り返されてきたことにあるだろう。またメディアが果たしている役割も大きく、独自の取材により関係者の証言を記事にして残してきた。今となっては鬼籍に入った関係者も多く、貴重な資料となっている。

5－（4）児島泰彦のケース

児島泰彦（現安芸郡坂町出身）は「未婚」で応召した。戦没オリンピックが「未婚」で、しかも家系が絶えている場合は応召後の追跡調査が困難なことも多いが⁴²、児島のケースは甥によって遺品（応召前の日記など）が保管され⁴³、軍歴証明（人事記録）の入手もなされており、生前のエピソードも残されている。

軍歴証明書によれば児島の戦死日と場所は、1945 年 6 月 12 日沖縄県島尻郡小禄村となっている。これまでの筆者らの調査では「沖縄方面」とだけ記されていた。『戦史叢書』⁴⁴によると、小禄地区の戦闘で児島の所属部隊（第 951 海軍航空隊に主計中尉として任務に就いていた）は、6 月 11 日に「沖方根司令部に十日夜終結してきた九五一空が加わり、最後の勇を振るって奮闘し」翌日には「沖方根の通信は 12 日 1600 連絡を絶つ」と記されており、6 月 12 日が児島の戦死日とされている。特に全滅した部隊での戦死は軍歴証明書が必ずしも事実を正確に記述しているとは限らないだろうが、遺族からの軍歴証明書の提供（閲覧）が戦没オリンピックの応召後の分厚い記述につながることは確かである。

ところで玉井（1983 年）は、児島がいかにもオリンピックだったことを物語る以下のような話を伝えている。「米軍が上陸したばかりの頃、彼はこう語っていた。『僕は泳いで与論島に行く。そのあと島づたいに奄美大島まで行けばしめたものだ』さすがにオリンピック・メダリストのスイマーである」⁴⁵。児島はベルリン五輪に向かう途中、シベリア鉄道の長旅で体調を崩しメダルを期待されながら、実際には 6 位（100 m 背泳ぎ）だったが、水泳選手だったオリンピックらしいエピソードが戦地に残っているケースである⁴⁶。

前述したようなエピソードは事実アプローチの手がかりとなる。できるだけ多くの史料（資料）から集

めることが今後の課題でもある。

5－(5) 高田静雄のケース

高田静雄（現広島市西区出身）は戦地で亡くなったオリンピックではない⁴⁷。1963年12月10日、原爆症により54歳で死没した。原爆が投下された日、爆心地から約680mにあった勤務先の中国配電（現中国電力）本店ビル2階の奥で被爆した。「肩にも飛び散ったガラスが突き刺さったが、部屋の奥にいたので命が助かった」⁴⁸という。高田は判明している戦没オリンピック38人の中で唯一被爆が原因で亡くなり、「2016年曾根・ト部名簿」に加えた選手である。高田は特に1945年以降に「戦争が原因で亡くなったオリンピック選手」を再調査する上でも重要なケースである。

早稲田大学では、「原爆」関連の「死没事由」の記載について「広島・長崎における原爆における死没も広い意味では戦災者といえようが、これについては特に、非戦闘員の場合は『原爆』、軍人については『戦死（原爆）』と記した」⁴⁹と区別している。例えば実際の名簿には「20・8・6原爆」「20・8・6戦死（原爆）」と記されておりその違いがわかる（20・8・6－28・11・8まで記載あり）。

一方、慶応大学⁵⁰では、戦没地（当時の呼称）「20／8／06 本土広島」と記載され、直接「原爆」とは記されていないが戦没日からその死没事由がおおよそ原爆による犠牲であることが推測できる（20／8／6－22／7／6まで記載あり）。

では被爆後にいつまで生存していれば「戦没者」であり、いつからが「被爆者」になるのか。そのような狭義の議論は必要ないだろう。ベルリン・スポーツ博物館の「世界戦没オリンピック」の定義を援用するまでもなく、戦争（原爆投下）が原因で被爆し亡くなったオリンピックは、経年に関係なく「戦没者」として扱うことには全く問題ないと考えるからである。

高田は被爆による闘病生活を続けながら戦後を生きた。最近、高田の肉声テープが残っていたことが遺族（孫・敏明）によって発見された。1960年8月に「何かの番組」でインタビューされたのを録音したものらしいが、被爆直後や原爆症で苦しんだ日々を以下のように語っている。

（原爆を受けた時には）目の前に爆弾が落ちた感じでしてね。一時は人事不省じゃったですけど。外傷は左足のアキレス腱、左肩。（略）ここ（どこか）に行こうと思ったときは、相当静養してですね、じっくり休んどかんと出れんので。原爆症でしてね。肝臓がいつも四方腫れているんですよ。腰が曲がってですね、お見受け通り歩行がやっぱりやねこい（難しい）んですよ⁵¹。

高田は戦前、戦後にかけて多くの「物」や「写真」を保管し、残している⁵²。それはスポーツ史の「証言」となり得る貴重な史料であり、被爆後の市井の人々の暮らしを読み解く上でも重要な遺品である⁵³。高田は「戦争犠牲者」である。病に苦しむ被爆者にとって自身の「戦争」が終わるのは鬼籍に入った日かもしれない。高田は死没した翌1964年8月6日の平和記念式典において、平和記念公園の原爆死没者慰霊碑にその名前が記載された名簿が納められた。日本で初めてオリンピック夏季大会が開催される2か月前だった。

6 新たな「戦没オリンピック」名簿の作成（2020年）－修正と更新

表1は2020年1月31日現在の新たな「戦没オリンピック」名簿である。戦没日の特定に関しては、年月日まで調べるべきだが、遺族からの「軍歴証明書」の提供は一部にとどまっているため、「年」または「年、月」しかわからないオリンピックもいる。また戦没日が判明しても誕生日の詳細（月日まで）が分からない場合もあり、死没時の年齢を基本的には「数え年」とし、先の全てが判明していれば「満年齢」も表記した⁵⁴。今回の表では「出場種目と成績」はJOCのホームページ（HP）を参考にしている。JOCのHPには「補欠」として参加した選手は記載されていない。今回の作成名簿ではこれを「補欠」とせず、「1982年大島名簿」の

記載に沿って「出場機会なし」と表記した。

また戦死した時点で原隊からは進級後の階位で発表されるが、これまでの名簿では階位が曖昧なケースもあった。そのため生前最後の階位となっているオリンピックもいる（例えば大江季雄など）。国内で戦病死となっている横山隆志（陸軍二等兵）や陸軍特務飛行隊員として戦死した石田英勝などは、最終的な階位を確認できないままとなっている。

さらに「2016 年曾根・ト部名簿」では記載していなかった「出身地」と「軍籍、所属部隊」を、今回の表では新たな項目として載せている。「出生地」か「出身地」かが不明というケースもあったが参考にした文献に倣った。また戦局が極めて厳しくなった時期からは部隊の再編制が行われ、最初に入隊した郷土部隊から戦没時までには所属部隊がたびたび変わっているオリンピックもいる。したがって彼らが所属した全ての部隊は表記できていない。追跡調査をする際の参考として掲載した。

なお、「戦没オリンピック」をめぐる調査の課題は、事例でも示したように全ての遺族への聞き取り調査や軍歴証明書の閲覧ができていないことである。したがって 2020 年現在の戦没オリンピック名簿は完成した名簿ではなく、今後も新たな情報が出てきた時点で修正と更新を繰り返すことになる。現時点で本名簿を公表するのは、「2016 年曾根・ト部名簿」に誤りが少なくなかったため、中間報告として本稿で公表することとした。

7. むすびにかえて

日本が初めてオリンピックに参加した 1912 年ストックホルム五輪から、戦前の最後のオリンピックとなった 1936 年ベルリン五輪までの夏季・冬季オリンピック大会参加者は、役員・選手合わせて延べ約 624 人となっている⁵⁵。この中には複数回参加している役員・選手が含まれており、また「出場機会なし」だった選手は JOC の HP には記載されておらず、現時点で正確な全体の数を筆者は把握できていない。本来ならば JOC や日本オリンピックズ協会などが率先して調査すべきであるが、完全版の「戦没オリンピック」名簿を作成するには時間と労力が必要で、しかも当時を知る証言者としてのスポーツ関係者はほとんどが鬼籍に入っている。

しかし繰り返すが、「戦没オリンピック」調査で重要な課題は、「戦病死」のオリンピックが単に「病死」と記載され、戦没オリンピック名簿から漏れていないかを確認する事であり、公表した戦没オリンピックのライフストーリーを分厚く記述することにある。広島出身選手の事例でも示したように、先の課題を解決する方法の一つは「遺族の証言」を得ることであり、史料（資料）や文献からできるだけオリンピックの応召後のエピソードを集め、「軍歴証明書」と合わせて検証していくことである。残念ながら遺族や縁戚に当たる関係者の所在が不明だったり、証言者がかなり高齢であったり、闘病中であったりなどの理由で聞き取り調査が困難な場合や、遺族の所在が判明しても「聞いていないのでわからない」という事態もあるが、しかしそれらの作業を通じてこそより正確な調査内容になると考える。

「戦没オリンピック」調査が等閑に付されたまま戦後 75 年が経過しようとしている。しかし遺族や縁戚を捜し出すことは、まったく不可能なことではないだろう。

先の戦争や原爆によって多くの人々が命を落とした。その悲惨さは「戦没オリンピック」だけが背負ったものではない。ただ、38 人の「戦没オリンピック」という枠組みからでも先の戦争を振り返ったとき、戦争を知らない世代もその実態を俯瞰できるのではないだろうか。オリンピックの「栄光」を称えると同時に、戦没オリンピックの群像は「決して忘れてはいけない」ことが何かを後世に伝えるものだと筆者は考える。

謝辞

本調査ではメディアから有益な情報提供があった。筆者が遺族捜しをする際には、特に以下の方のご協力と貴重な情報・資料の提供を頂いた。記して謝意を表します。西本雅実氏（中国新聞社）、藪崎拓也氏（静岡新聞社）、大島祥平氏（毎日新聞社）、國貞仁志氏（京都新聞社）、加藤行平氏（東京／中日新聞社）、西村曜氏（共同通信社）。

注

- 1 被爆 70 年史編修研究会編『広島市被爆 70 年史』広島市、2018 年、p.188。
- 2 金柳晴海『広島スポーツ 100 年』や広島市企画調整局文化担当編『スポーツ文化広島 100 年』などがある。
- 3 筆者は『被爆 70 年史』の「特論 4 スポーツ王国広島」(pp.532-543)を担当した。
- 4 曾根幹子・ト部匡司「日本人戦没オリンピック名をめぐる混乱とその真相—ベルリンに届けられた大島鎌吉の作成名簿更新の試み—」『広島国際研究』第 22 巻、広島市立大学国際学部、2016 年、pp.117-130。うち「日本人戦没オリンピック名簿」(2016 年曾根・ト部名簿)は pp.125-126。
- 5 「戦没選手」名簿と表記したのは、朝日新聞 1984 年 7 月 27 日による。
- 6 大島鎌吉(1908 - 1985 年)は石川県金沢市生まれ、関西大学卒業、1932 年ロサンゼルス五輪・男子陸上三段跳び 3 位、1936 年ベルリン五輪(三段跳び)6 位入賞、毎日新聞ベルリン特派員、東京本社政治記者、運動部次長などを経て 1959 年 JOC 委員、1964 年東京五輪日本選手団団長、大阪体育大学副学長などを歴任。1982 年にオリンピック平和賞、功労賞を受賞。
- 7 前掲曾根・ト部(2016) p.119。
- 8 後日の調査で「1956 年慰霊祭名簿」は織田幹雄が広島市に寄贈しており、市が計画した博物館資料として保管されていることが分かった。先の冊子には第 16 回オリンピック・メルボルン夏季大会を前に「オリンピックについて国民の理解を深め(略)、国家存亡の危機をも経たことと(略)、今日はこれら先輩知友の霊を慰め、遺族の方と共に、在りし日の面影を偲びながら(略)オリンピックの思い出の数々を語り合いたいのもであります」と開催趣旨が記されている。式次第によれば、慰霊祭は 1956 年(昭和 31 年)6 月 23 日午後 1 時～2 時に日本体育協会(会長:東龍太郎)の内庭で行われ、冊子の最後には「想い出の人々」として写真付きで物故者が載っている。新聞に掲載された戦没オリンピック 30 人のうち、村山又芳(ロサンゼルス五輪、漕艇・出場機会なし)に関しては「住所(※遺族)」は掲載されているが、その他の情報は載っていない。しかし朝日新聞 1984 年 7 月 27 日の戦没選手名簿には病死とあり、埼玉には実姉(当時 77 歳)がいたことが分かる。
- 9 「1956 年慰霊祭名簿」には氏名の漢字表記の間違い、戦死情報、逝去年(戦死の場所、年月日)、出場機会のなかった(補欠)選手名などに記載漏れが見受けられる。毎日新聞(1992 年 12 月 17 日)では I O C 名誉委員の清川清二が「体協 75 年史などの資料でも、戦没者には触れられていない。きちんとすべきだ」と理事会でコメントしている。
- 10 岡邦行『大島鎌吉の東京オリンピック』東海教育研究所、2013 年、p.289。
- 11 4 人とは以下、①横山隆志(ロサンゼルス五輪・水泳/競泳)、②前田倍三(ベルリン五輪・水泳/水球)ソロモン群島で戦死)、③大沢政代(ベルリン五輪・水泳/飛込 6 位)、④高橋豊二(ベルリン五輪・サッカー)である。
- 12 記事に掲載された戦没選手名は、遺族が靖国神社の展示依頼に承知したもので「入賞メダルは体協に保存されているので、留守宅から寄せられたのは、当時のユニホームや新記録証明書、出場記念写真が多い」とある。
- 13 昭和館学芸部編『昭和館特別企画展図録 オリンピック栄光とその影に —アムステルダム大会から東京大会まで—』(2008 年)には「戦没オリンピック選手リスト(1998 年 4 月判明:戦没オリンピック 35 人)」(p.38)が掲載されている。
- 14 選手氏名の漢字間違いは、以下の通りである。ホッケーのロサンゼルス五輪代表の柴田勝巳→勝見(1956 年の名簿も J O C のホームページも「勝巳」となっている)、ベルリン五輪代表のホッケー脇坂貞雄→貞夫、陸上総務役員の高野重機→重幾。なお、筆者らの論文(2016 年)でも柴田と脇坂の漢字表記が間違っていた。この指摘は一橋大学(旧東京商大)「一橋 いしづみの会」世話人代表・竹内雄介から寄せられた。高野に関しては遺族から戸籍謄本が送られ確認した。
- 15 ただし「2016 年曾根・ト部名簿」作成時点では、「1956 年慰霊祭名簿」を閲覧していなかったが、この 2 つの名簿を照合しても戦没者は一致しない。
- 16 世界戦没オリンピック名簿に関する詳細は、曾根・ト部(2016 年)を参照されたい。ちなみに戦没者として間違っ記載されていた選手は「小池禮三(1915 - 1998 年)ロサンゼルス五輪・水泳/競泳 200 m 平泳ぎ 2 位、ベルリン五輪、同種目 3 位」と「伊藤三郎(1915 - 1978 年)ベルリン五輪・水泳/競泳 200 m 平泳ぎ 5 位」である。
- 17 釜崎太「カール・ディームの「スポーツ教育」論にみる「身体」と「権力」」『弘前大学教育学部紀要』第 99 号、弘前大学教育学部、2008 年、pp.87-105。
- 18 世界戦没オリンピック名簿を管理するドイツベルリンスポーツ歴史フォーラム・スポーツ博物館振興協会代表のゲルト・シュタインズ(Steins,Gerd)によれば、戦争と暴力によって亡くなった(殺された)オリンピック選手(「vom Krige und Gewalt getoteten Olympiateilnehmer」)とは、「戦争だけでなく例えば 1972 年ミュンヘン五輪開催中に選手村でテロリストに襲撃されたイスラエル選手団の役員・選手、強盗など罪もなく理不尽に殺された人のことであり、原爆の後遺症で亡くなったオリンピックも入る」とのことであった(聞き取り調査日:2015 年 11 月 26 日ベルリン・スポーツ博物館事務所)。
- 19 前掲曾根・ト部(2016)、pp.125-126。
- 20 早稲田大学の戦争犠牲者名簿は、早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第四巻』(早稲田大学出版部、1992 年、pp.180-292)による。
- 21 慶応大学の戦没者名簿は、白井厚編『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿(慶應義塾福澤研究センター資料 11)』(慶應義塾福澤研究センター、2007 年)による。
- 22 前掲『早稲田大学百年史 第 4 巻』pp.156-159。横山隆志(1945 年国内で「病死」とされている)の名前は、同大の「戦争犠牲者名簿」に見あたらない。
- 23 前掲白井(2007)の名簿には、「本名簿の作成上の問題点」(pp.6-7)が記されている。なお、村山又芳(1945 年 5 月病死)は「1982 年大島名簿」では慶応大となっているが、同大の戦没者名簿には名前が載っていない。なお村山の出身大学を中澤篤史(2010 年)も「慶應義塾大学」としている。
- 24 新井(佐藤)茂雄(ベルリン五輪・水泳/競泳)の母校・立教大学でも戦没学生について調査をしているが「『戦死または戦病死』と断片的にしか記載されていなかった」(静岡新聞 2019 年 8 月 10 日付)とある。その他日本大学、明治大学をはじめ多くの学徒を戦地に送った大学では戦没者名簿を作成している。
- 25 前掲『早稲田大学百年史 第 4 巻』では「死没事由の大部分は、名簿では『戦死』となっている」(p.181)とし、厳密に言えば、旧陸海軍人の死亡は戦死・戦傷死・戦病死・不慮死・病死・事故死・殉職に分類され、「戦死」には、広義と狭義が入り混じっているとされている。

- 26 前掲白井 (2007、p.7) では、戦死、戦病死、戦傷死、飢餓、殉職、事故死、自殺、自決、刑死、法務死などによる死亡者、敗戦後の引き上げやシベリア抑留中の死亡も含まれているが、名簿に記載していない。
- 27 同書、p.6。
- 28 百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』吉川弘文館、1990 年、pp.273-274。
- 29 前掲『被爆 70 年史』の「特論 4 スポーツ王国広島」(pp.538-539) 参照。
- 30 前掲『早稲田大学百年史 第 4 巻』、p.197。
- 31 鯉十一会『歩兵第十一聯隊史』1993 年、p.10。
- 32 報道の時点では土井修爾の父親の話は「戦地に行ったがすぐに帰還せざるを得なかった」のか「戦地に行く前に罹患したのか」どちらともとれる。
- 33 最初の基本的調査は長女 (85 歳) に、2020 年 1 月 11 日と 13 日に電話で実施した。
- 34 前掲鯉十一会 (p.418) によれば、「徐州作戦が終了し第 5 師団が青島終結した 13 年夏、それまで 5 号機しかなかった連隊通信班に 94 式 6 号無線 10 基が配備され、その要員として各小銃中隊から 11 年兵を長として、十二年兵、補充兵の 3 名を転属させ、合計 30 名を以て 6 号無線機小隊が編成された」とある。遺族の証言から、土井は出征する前に内地での無線訓練中に罹患したとみられる。
- 35 同様の例として、横山隆志 (高知県出身、ロサンゼルス五輪・水泳/競泳) などがいる。横山は「1982 年大島名簿」では「国内で戦病死」となっているが、「1956 年慰霊祭名簿」には死因の記載は全くなされていない。『Number 103』(1984 年)には、「かぞえて 33 歳の時に、心臓発作かなにかで亡くなっています」(義姉・千代喜談) とある。読売新聞 1964 年 9 月 28 日付には、「馬術金メダル西「中尉」ら 戦争に散った 31 人」の名前が掲載され、横山は「国内で戦病死」となっている。ちなみに横山は広島二中 (現広島県立広島観音高校) のプール落成式に招聘されている (中国新聞 1933 年 9 月 25 日付)。記事では「早稲田大選手」としか書かれていないが、「プール落成記念水泳大会」(主催広島二中) のプログラムには、土井と共にロサンゼルス五輪に出場した水球チームの横山隆志と松本隆重 (早大) のサインが残っている (『創立 70 周年記念誌白楊』1993 年、p.97)。
- 36 前掲『早稲田大学百年史 第 4 巻』、p.213。
- 37 前掲鯉十一会、p.456。
- 38 例えば、梯久美子『硫黄島栗林中将の最期』の中にも河石達吾に関して書かれている (pp.62-71)。
- 39 旧制修道中学は、1945 年 8 月 6 日の原爆により校舎の壁が吹き飛ばされ大部分は倒壊したが焼失しなかったことで、生徒に関する貴重な記録やその他の資料 (物品を含む) が残った (2018 年 6 月 18 日修道学園訪問調査)。
- 40 『相澤巖夫追悼録』、『阿武巖夫選手伝記』、『リンデンの梢ゆれて一大江季雄の青春』。近著ではベルリン五輪サッカー代表の活躍と戦死を描いた竹之内響介著『ベルリンの奇跡』(2015 年) などがある。阿武巖夫 (ロサンゼルス五輪・陸上)、相沢巖夫 (アムステルダム五輪・陸上) のように、郷里の有志や学友による追悼録などの出版物によって生前の詳細な様子が分かる場合もある。
- 41 河石達雄は一度も会えなかった父・達吾について、現在も積極的に語り継いでいる (「会えなかった父からの手紙」『三田評論』2019 年 12 月号、慶應義塾、2019 年、pp.5-6)。
- 42 例えば右近徳太郎 (ベルリン五輪、サッカー) は長男だが次男・恭次郎もブーゲンビル島で戦死している。サンパウロ在住の縁戚から徳太郎は「既婚」と聞いている。現在では家族 (父母弟妹) も亡くなっているため部隊史以外に情報はつかめていない。
- 43 児島の「文学ノート」と題された日記は、ベルリン五輪の選抜大会、競技会の様子などを書き残しており『坂町史』(坂町史編さん委員会編) にも掲載されている。英文で書き残した日記もある。地元紙には児島や河石に関する記事もたびたび掲載されている (中国新聞 2019 年 2 月 15 日)。
- 44 防衛庁防衛研修所戦史室編『沖縄方面海軍作戦』(戦史叢書 17)、朝雲新聞社、1968 年。
- 45 玉井向一郎『風に立つー沖縄海軍航空隊の最期』岩波ブックセンター信山社、1983 年、p.188。
- 46 沖縄・伊江島の戦闘で亡くなった満留勉 (ベルリン五輪・ボート) にも、泳ぎが達者だったと思われるエピソードが残っている (防衛研究所『沖縄作戦二於ケル独立混成第四十四旅団第二歩兵隊第一大隊史実史料 伊江島』昭和 22 年 3 月 25 日、第 33 庫残務整理部、p.2929)。
- 47 高田が兵役に就かなかった理由を家族もほとんど聞いていない。高田は広陵中学に入学する 2 年前に父親が他界している。実家は裕福だったが長男・静雄は小学生で「戸主」となり母と妹の面倒を見ることになった。このことなどから高田は兵役免除 (兵役法第四十条など) の対象になっていたと考えられる。
- 48 「原爆が投下された日、亡くなった広島女学院高女 (現広島女学院中高) の長女・千鶴子は学徒動員で建物疎開 (市役所周辺の雑魚場町) をしていましたが、原爆投下時には学校のグラウンドに集合していました。静雄は千鶴子の足取りをたどり四方捜しました。一週間後知人が『高田千鶴子』の名前を見つけ、江波の収容所にいると知らせが入り自宅に連れ帰りました。長男・敏は小学校 (国民学校) 登校途中に橋の上で、たまたま友達の方を振り向いたときに被爆したと聞きました。頭から背中にかけて足までケロイドになったが命は助かった」(高田敏明への調査：2018 年 3 月 14 日、2020 年 2 月 1 日)。
- 49 前掲『早稲田大学百年史 第 4 巻』、p.181。
- 50 前掲白井。
- 51 高田敏明からテープの内容に関して情報提供があり (2020 年 1 月 27 日)、その後肉声を確認した (同年 2 月 10 日)。
- 52 原爆が投下された際、大切なものは巳斐上町に荷物疎開させて残った。ベルリン五輪に持参したトランクや公式ユニホームなど多数残されている。静雄の残した写真は、写真家でもある孫の敏明が「高田トシアキ」としてネガも含めて丁寧に保管しており、「もうひとつのオリンピック高田静雄・聖なる道」と題して東京など各地で写真展を開催し、戦没オリンピック高田静雄を語り継いでいる。
- 53 中国新聞 2018 年 7 月 16 日付「被爆オリンピックの視点」、中日新聞 2019 年 8 月 6 日付「被爆オリンピック残した光」。
- 54 例えば相沢巖夫は公報では「1945 年 10 月 2 日」となっている。追悼録では「公報はまだ届いていなかった」時点での話であるが、巖夫の直属の上司から別の戦死日の日時が知らされている。戦死日については遺族が判明している場合、軍歴証明などを参考に遺族が「命日」と定めている月日に倣った。

55 (公益財団法人) 日本オリンピック委員会ホームページ「日本代表データ検索」<https://www.JOC.or.jp/games/olympic/record/> (閲覧日: 2020年1月10日) を参照。

参考文献一覧

- 防衛庁防衛研修所戦史室編『沖縄方面海軍作戦』(戦史叢書 17)、朝雲新聞社、1968年
『Number』103号「オリンピック全調査 日本のゴールド・メダリスト 102人の人生」文藝春秋社、p.32
Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. (1983): Olympiakämpfer: Mitteilungsblatt der Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. In: Sonderdruck aus “Olympisches Feuer”, Heft 6 Nov./Dez. Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. (1981): Olympiakämpfer: Mitteilungsblatt der Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. In: Sonderdruck aus “Olympisches Feuer”, Heft Dezember.
被爆70年史編修研究会編『広島市被爆70年史 –あの日まで そして、あの日から 1945年8月6日–』広島市、2018年
広島市企画調整局文化担当編『スポーツ文化広島100年』広島市都市生活研究会、1986年
梯久美子『硫黄島栗林中将の最期』(文春新書) 文藝春秋社、2010年
金樹晴海『広島スポーツ100年』中国新聞社、1979年
釜崎太「カール・ディームの「スポーツ教育」論にみる「身体」と「権力」」『弘前大学教育学部紀要』第99号、弘前大学教育学部、2008年、pp.87-105
鯉十一会編・発行『歩兵第十一聯隊史』1993年
京都大学陸上競技部蒼穹会・第四高等学校あかしや会・相沢洗一(遺族代表)編『相沢巖夫追悼録』あい出版(非売品)、1943年
河石達雄「会えなかった父からの手紙」『三田評論』2019年12月号、慶應義塾、2019年
百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』吉川弘文館、1990年
中津嘉和編『山口県最初のオリンピック選手 阿武巖夫選手伝記』大井ふる里愛好会、2001年
中澤篤史「オリンピック日本代表選手団における学生選手に関する資料検討 – 1912年ストックホルム大会から1996年アトランタ大会までを対象に–」『一橋大学スポーツ研究』Vol.29、一橋大学スポーツ科学研究室、2010年、pp.37-48
岡邦行『大島鎌吉の東京オリンピック』東海教育研究所、2013年
白井厚編『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿』(慶應義塾福澤研究センター資料11) 慶應義塾福澤研究センター、2007年
曾根幹子・ト部匡司「日本人戦没オリンピック名をめぐる混乱とその真相—ベルリンに届けられた大島鎌吉の作成名簿更新の試み—」『広島国際研究』22巻、広島市立大学国際学部、2016年、pp.117-130
昭和館学芸部編集・上孝道監修『昭和館特別企画展図録 オリンピック 栄光とその影に—アムステルダム大会から東京大会まで』昭和館、2008年、p.38
竹之内響介著、賀川浩監修『ベルリンの奇跡 日本サッカー煌きの一瞬』東京新聞社、2015年
玉井向一郎『風に立つ—沖縄海軍航空隊の最期』岩波ブックセンター信山社、1983年
早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第4巻』早稲田大学出版部、1992年
結踏一朗『リンデンの梢ゆれて—大江季雄の青春』出版芸術社、1991年

【新聞】

- 『朝日新聞』1984年7月27日付夕刊、「戦火に散ったオリンピック名簿『平和の鐘』に日本人の30人」
『朝日新聞』1984年8月11日付朝刊、「ベルリン五輪『平和の鐘』に思い新た」「水球の夫 戦火に散った」
『朝日新聞』1984年8月11日付朝刊、「戦地に散った五輪選手 県出身3人、出場後に出征/広島県」広島版
『中国新聞』1933年9月25日付朝刊、「きのふのスポーツ(二)」
『中国新聞』1938年7月23日付夕刊、「土井中尉病死が残念」
『中国新聞』1938年7月27日付夕刊、「赫々の武勲を土産に無敵の勇士ら帰還」
『中国新聞』2019年2月15日付朝刊、「戦没選手遺影を母校へ 広島空制修道中出身の2人」
『中国新聞』2020年1月6日付朝刊、「この人」
『毎日新聞』1992年12月17日付朝刊、「五輪選手の戦没者、JOCが調査へ」
『静岡新聞』2019年8月10日付朝刊、「悲しみのオリンピック、戦場に散った県勢 最後の姿母校もつかめず」
『読売新聞』1964年9月28日付朝刊、「五輪選手を遺品でしのぶ 靖国神社宝物館」